

## 大学と数式処理学会の未来

高山信毅

本年度にはいり国立大学をめぐる状況がめまぐるしく変化してきている。国立大学法人化、トップ 30、大学合併、競争的研究経費、研究補助員雇用などいろんな政策が目白おしである。政策は時間とともに変化したり消えたりするものであるので、必要以上にこれらに振り回される必要はないと考えるが、その背後にある“声”には科学者は耳をしっかりと傾ける必要がある。

私が想定しているこの声の内容はさておいて、“研究”にはうまくいくための絶対的処方せんはないということはいっておきたい。上手なマネジメントはたしかに大きな助けにはなるものの、結局はいかに面白い研究題材に出会い、それにたいして面白い回答を与え、その考えを広めていくかである。したがって、結局は研究者個人や研究グループの資質や地道な努力や研究機関の雰囲気や研究の成否の大きな部分が帰着するといいたい。

このような制約のなかで、学会活動は研究のハイレベル化や広報活動に寄与していかないといけない。いくつか提言をしたい。

1. 雑誌“数式処理”の英文研究論文は電子化して、数式処理学会のウェブサイトにおく。MathReview等のデータベースサービスにも登録する。英文の雑誌名は“Japan Journal of Symbolic Computation”位が簡潔でいいだろう。このような形で公開されていると、投稿や執筆の意欲が大いに増す。また採択論文をニッチ分野でやっていくのも面白いと思う。
2. 和文の解説もおもしろいものは電子化して、万人の購読を願う。
3. 学会発表がハイレベルとなるよう皆で地道な努力をする。とくに境界分野の講演は当該分野の専門家を聴衆によんだりして、どの分野からみてもハイレベルであるようにこころがける。
4. 予算は本当にそれが必要なプロジェクトへは、なかなかこない。予算を保有する責任者はつねにアンテナをはり、果敢に新しい有望なプロジェクトに投資すべきである。学術振興会のレフェリーは平均化された意見しかだせない。
5. 外国旅行したら、研究関連の友人づくり、研究情報の交換、こちらの研究内容の広報等、最大限の努力をすべきである。すこし喋りすぎるくらいが丁度よい。

神戸大学理学部 高山信毅